

李 亦萱 (リ イセン)

中国出身

上智大学 文学部新聞学科

1. 自由テーマ

あつという間に、日本で 5 年間で過ごし、日本が自分の第二の故郷になろうとしているような気がしました。

この第二の故郷でよく感じることのひとつに、「孤独」があります。この5年間で、最初に孤独を恐れることから、孤独を平気で受け入れることができるようになり、孤独を楽しむことができるようになり、最終的に孤独の中に自分の人生の意味を見出すことができるようになってきました。そうしているうちに、自分のことも、出会ってきた日本人のこともわかってきました。

日本に来る中国留学生からよく聞きましたが、日本では常に寂しさを感じていますので、留学生たちは常に留学生の集団内部しか集まっていないようです。それはどこの国でも同じだと思いますが、人は自分と似た集団からこそ安心感を得られます。最初の私もそうでした。そのため、大学の中で多くの日本人の同級生がいるにもかかわらず、深く会話したことができず、彼らに対する印象もずっと「日本人は冷淡で、疎遠です」に留まってしまうていました。確かにある程度、中国に比べて、日本社会では、人と人との距離は離れていて、「他人に迷惑をかけてはいけない」という考え方が日本社会に根付いていることで、人間関係に疎遠の部分があると思います。自分から見ると、日本人同士の日常的な交流でも、素直に本音を話し出すことより、その場の空気を読んだ上で平

和を保つことがもっと重視されているため、日本に来た最初のうちになかなか日本人と心から親しくなれず、大学の飲み会でみんなが居酒屋で盛り上がった時でもなぜか孤独を感じていました。

そのような時、「どうして私は日本に留学することを選ぶのですか?」、「ここに来て、中国では得られないものはなんですか?」、「私が追求している夢は本当に今の感じている孤独に抵抗できますか?」という自問自答が始まってきました。

今の私の答えは、「イエス」です。孤独感は自由がつきもので、自分に向き合う時間をたくさん持つことができました。そのうちに、自分を理解しながら、他者のことも理解するようにはできました。それは、日本に来てジャーナリズムを勉強していた私にとって、最も大事な発見でした。一人で食事をしていた時に、アメリカ同時多発テロ事件で息子を亡くしたレストランのオーナーのことを知り、彼の過去の痛みと晩年までずっと続けている世界平和のための各種の努力が初めてわかりました。一人でボランティア活動をしていたときに、定年退職後に壊れたおもちゃを修理するおもちゃドクターに出会い、彼が社会にもう一度役に立ちたいという考えを理解できるようになりました。そして、去年1年間 LVMH ジャパンでインターンシップをしていたとき、職場でのマイノリティーの権利のためにずっと奮闘している50代の女性の上司のもとで、ダイバーシティの推進がさらなる努力が必要なこの国で女性にある本当のパワーを見せてくれました。日本社会で高齢少子化

が進んでいる中、晩年まででも自分の価値を重視して社会に貢献しようとしている彼らたちを見て、昔からの日本人の精神力と不屈の精神を実感し、感心しました。このような精神は、年代の制限を超え、私のような若者に何らかのインスピレーションを与えられると思います。

20 代の私たちは、将来の道を考える時間は十分にありますが、やはり時間はとても有限の、貴重なもので、選択は重要です。もし、私たちも年をとって、最後に自分の人生を振り返ったときに、一番やりたかったことをやって、もう後悔はないというのを言えるでしょうか？ 周りにもう卒業して就職活動も終わって社会人になる友たちを見てこう考え始めてきました。自分が接する人も限られていることもあるかもしれないですが、周りの日本人の友達を見て、彼らには他人より立ち遅れている不安と焦りを感じてきました。実際にこの 5 年間も、日本社会での集団意識をかなり感じ、みんなは他人と違うこと、孤立されることを恐れていると感じました。個人的に、そのような日本社会にある程度の違和感を覚えています。前に述べたように、日本社会で人との距離がきちんと保たれていて、人間関係に疎遠の部分著しく存在していますが、同時に社会の中での一人ひとりに一致性が要求されていて、個性を曝け出すことを恐れています。そのような矛盾は今の日本がどんどん保守になっている一つの原因だと考えています。自分の気持ちを素直に伝えられないことにストレスを感じてしまっていますが、安定した環境を壊れてしまうのをもっと恐れているため、日本の若者でも、他の国の若い人に較べて安定志向の傾向が高いです。

もちろん、私が出会ってきた自分の価値を貫く

高齢者たちのように、自分の価値を重視している人な試みをしている若い人がたくさんいますが、保守的な社会的雰囲気自分の声が弱くて出せなくなることも少なくともあります。外国人留学生の私から見れば、日本人は自分の孤独を大切にされた方がよいのではないですか？ 実に、中国ではよく日本の「職人気質」が推奨されていることがあります。それは自分が奉仕した分野では自己を忘れる同時に、他人の目も気にしない精神だと思います。

2. できたこと・将来計画

奨学生の期間中で、私は自分の夢に向かって色々な試みをしてきました。私の夢は、ジャーナリズムやメディアを通じて、世の中に起きていることを人々に伝え、読者の心の中に何かの変化を期待し、それを最終的に社会の変化につながることです。それを目標として、自分は LVMH ジャパンで1年間ダイバーシティー・インクルージョンの推進を仕事内容としたインターンシップをしてきました。この1年間、私は LGBT 者、障害者、育児の女性職員など多様性豊かな人々に出会って、彼らの物語に耳を傾け、彼らのことを理解した上で LVMH ジャパン初の「ダイバーシティー・インクルージョン」をテーマとしたニュースレターを発行しました。このニュースレターは LVMH ジャパンの管理層と 70 個以上のブランドの社員に向けて発信し、好評を広く博してきました。読者は、身近な社員の物語からダイバーシティーの知識を普及することで、心を揺らすくらいの説得力を持っているとコメントしてくれました。また、職場の女性エンパワーメントを推進するキャンペーンをして

いた時に、私は従来のセクハラ防止規程に読みにくく、理解しにくい部分を意識し、本当のより良い実践を導くために誰でも簡単にわかるコミックの形で新しいセクハラ防止ガイドラインを作り出し、社内で発行されました。こうして、ジャーナリズムは、誰でも平等にメッセージを受け取られる伝達だと私がずっと信じています。

そして私は今アメリカのノートルダム大学に交換留学をしていて、映像の勉強を始めてきました。この2か月間、私はアイデンティティーをテーマとして、人種問題と若者の現状を映し出した2本の短い映画を作り出して、クラス内の最優秀賞をもらったほか、アメリカの学生から「アジア人のアイデンティティーは本当にかっこいい」という評判をもらって、何より嬉しいでした。映画は、一種のメディアはとして、まだジャーナリズムと違い、創造力を最大限に使って現実を超えるより良い世界を人々に見せることができると今の自分が考えています。

そのため、将来計画について、私はアメリカのジャーナリズム・メディアの大学院に入学し、その勉強をさらに進めると思います。そして大学院卒業後、自分は独立したジャーナリスト・アーティストとして活動し、自分の声をいろんな形で発信し、読者の心の変化と社会への良い影響を期待します。

以上